

---

# バカと超人と召喚獣

風林火陰山雷

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バカと超人と召喚獣

### 【Nコード】

N0506V

### 【作者名】

風林火陰山雷

### 【あらすじ】

結構、ありがちな設定なので気に入らないという人は見ないで下さい。

## 主人公紹介（前書き）

この小説は作者の気まぐれで書かれた小説なのであまり期待しないで下さい。

初投稿なので暖かい目で見守って下さい。

## 主人公紹介

平野 優樹（ひらのゆうき）

身長… 182cm

体重… 65kg

容姿… 全体的にBLEACHの黒崎一護で左目が赤いオッドアイ  
趣味… 楽器全般、歌、剣術

ムキムキではないが我流の剣術をやっているので筋肉はついている  
いわゆる、細マッチョ

修行の際に山籠りをしてクマと戦い追い払うも背中に3本の傷痕が  
残っている

そのため肌はさらさないようにしている

性格は義理と人情をとっても大切にしている友達のためなら自分の身  
もかえりみずに飛び込んでしまう

キレても、冷静さを見失わずに相手をどうやって陥れるか考えている  
案外、腹黒かったりする

去年のクラスは明久たちと違うクラスなので

明久たちは優樹のことは知らない

だが優樹は明久たちのことを知っている

明久たちが有名だったため

成績は学年主席どころか学園主席にすらなれるほど

（高橋先生と同レベル）

得意科目は数学などの理系科目

とはいえほかの科目もAクラスTOP10と同じぐらい

基本的に何でもそつなくこなす完璧超人

## 1話

ここは試験召喚システムの試験校である文月学園。

このシステムは、テストの点数に応じた召喚獣なるものを呼び出して戦えるシステムである。（起動キーは試験<sup>サモン</sup>召喚である。）

また、文月学園にはテストの上限がないため、どこまでも成績を伸ばすことが出来る。

そして『試験召喚戦争』（通称試験戦争）と呼ばれる、召喚獣を用いたクラス単位の戦争がある。

詳しいことは原作を読むかWikiなどで調べて下さいm（――）

作者の力不足です。

などとつらつら書いてきたが今日は1年の最後のテスト、いわゆる振り分け試験

そこからこの物語は始まる。

さて皆様初めまして

俺の名前は平野<sup>けいひ</sup>優樹<sup>ゆう</sup>つていいいます。

今日は文月学園で重要な振り分け試験があるんだが、

『さあてどうするかなあ』

俺は今、とても悩んでいる。

というのも、俺は自分というのも何だが頭がいい真面目にやればAクラスなんて簡単に入れるのだ。

『やっぱCクラスぐらいかねえ』

そうCクラスぐらいに入ろうかと思っている。

その理由は簡単、目立ちたくないのだ。

この学園の成績上位者は勝手に名前がひとり歩きしていく、だから俺は今まで総合2000点を狙ってとってきたのである。

『まあテスト中にでも決めるか』

そんな感じで楽観的に考えながら学園へと向かって行くのであった。

〈学園〉

『はあ、いつも見てもデカイよなあ』

道中何もなく学園に着くのであった。

〈テスト会場〉

『ん？あれは吉井か？』

俺はテスト会場に入ると、この学年で有名な吉井を発見した。

『あいつはどうせFクラスなんだろうなあ』

などと思いながら席にと着いた

『いや待てよ、あいつがいるならFクラスもありか?』

とFクラス入りも配慮しながらテスト開始を待った。

難しいとされる振り分け試験だが、優樹は

『何だ、結構簡単なんだな』

などと、頑張つて勉強している人から殴られても仕方ない様な戯れ言を言っているのであった。

(あつヤベツ!、普通に解いちゃってたよ)

『今から違つ答え書くの面倒だな、名無しにするか』

とFクラス行きを確実にしようかという時

バタツ!!

『ん?何だ?』

後ろに振り返り見てみると

そこには去年同じクラスだった姫路が倒れていた。

『おい、大「途中退場は無得点扱いになるがいいかね?」』

ピキッ、このやろっ!!

ガタツ、その音に続いて

「先生、姫路さんは体調が悪いんです、再テストをやらせてあげて下さい！」

（おお、吉井カッコいいな、なかなか言えんぞ）

「だめだ、規則で決められている」

ピキッピキッ

（やべえ、もうちょっと何か言われたらキレるかも）

「あんた先生だろ！生徒の体調を考えるのが普通だろ！！再テストぐらいやつてもいいじゃないか！！」

「たかが1人のために規則は変えられんのだよ」

（あー、これはだめだな）  
ガタッ

『先生、ちよつといいか？』

「どうし「バキッ」」

俺はその監督官の先生をぶん殴った。

「君、教師を殴ってただですむと思っているのか！？」

『テメエが教師を語ってるんじゃないよ、虫酸が走る、そして全国の教師に謝れ、テメエのことは腐れ外道って言っただよ』

そのまま振り返り、ただ呆然としていた吉井に俺は声をかけた。

『吉井、ちょっと姫路借りてくぞ』

「あつ、ちよつと」

教室を出る時に吉井が何か言った気がするが、気にせずに姫路をお姫様だっこして保健室に向かうのであった。

〈保健室〉

「んっ、うゝん？」

姫路が気がついたようだ

『姫路、大丈夫か？』

「あれ？平野くん？」

姫路は不思議そうに可愛く首を傾げながら聞いてきた

『おう、平野だよ。それで体調は大丈夫か？熱は引いたようだが』

「あつ、はい。大分楽になりました。ありがとうございました。」

『何に対しての感謝かわからんが受け取っとくわ。帰れそうか？』

帰れそうになかったら、送って行くつもりなので俺は聞いてみた

「え？はい。大丈夫です、帰れます。」

『そっか、なら俺は帰るな、そっかどうせ俺らFクラスだからこれから1年よろしくな』

返事もろくに聞かずに俺は帰って行った

「はい。さようなら。って平野くんもFクラスってどういう意味ですか！？帰っちゃいました。」

（自宅）

『疲れたなあ』

俺は帰宅してから着替えもせずにベッドに飛び込んだ

『Fクラスか、なかなか楽しそうじゃねえか』

俺はほくそ笑みながら眠るのであった

そして、その眩きは誰にも聞こえることはなかった

## 2話（前書き）

短いですが見てやってください

## 2話

〽振り分け試験結果発表・当日〽

良く晴れた青空の日

俺が気分良く歩いていると

「おい、遅刻だぞ平野。」

野太く暑苦しい声が聞こえてきた

『あれ？宗一じゃん、どうしたんだ？こんなところで』

「平野、先生をつけるといつも言ってるだろうが。お前だけだぞ俺のことを名前で呼ぶのは。」

この人は西村宗一、生活指導の鬼などと呼ばれる

トライアスロンが趣味のため生徒から鉄人と呼ばれている

俺は大概是宗一と呼んでいて、気分次第では鉄人と呼ぶこともある

『宗一、そいつは無理な相談だ。これは俺が俺たるために必要なことだからな。』

「全く、もういい。お前は他に言うことは無いのか？」

そうやって宗一は俺に聞いてきた

（たぶん、遅刻の謝罪を言わせたいのだろうが、ここはあえてネタに走ろう）

『今日も肌が黒いですね。』

（どうだ当たりか？）

「お前は遅刻の謝罪より俺の肌が黒いことを言いたいのか！？というか吉井と同じことを言うな」

（よっしゃ、大当たり）

『やっぱり遅刻の謝罪か、ネタに走ったかいがあつたつてもんだ』

俺は内心メツチャ喜びながら言つた

「わかつているなら謝罪をしろ、お前は頭の回転がはやいから相手をするのが疲れる」

宗一はため息をつきながら言つてきた  
だから俺は

『わりいな、でもなんでこんなところにいるんだ』

軽く謝つて話を変えた

「本当にお前というやつは、これだ。」

そう言つて俺に封筒を渡してきた

『これは？ああ振り分け試験の結果か』

（まあ俺はFクラスってわかってるんだけどな）

などと内心思いながら封筒を受け取った

ちなみにこの文月学園は全学年A〜Fクラスにわけられ

2年生以上は前年度の振り分け試験の成績によってクラスが決まる。  
Aクラスから始まりFクラスまで分けられる

（Aが上位Fが下位である）

「俺はな平野、お前のことをそれなりに頭が良くて友達思いなやつだと思っていた。」

（何か雲行きが怪しいな）

「だが違った、姫路のことを運んで行ったことはいい。しかし振り分け試験は名無しであったが、名前が書いてあれば学年主席になれたほだった」

（あつ、ヤバいかなあ）

「放課後、学園長室に來い。今まで手を抜いていた理由を学園長、高橋先生を含めてじっくり聞いてやる」

『orzやつてまった〜（´□、`）』

今、優樹の成績が先生たちにバレた瞬間だった

「とりあえず教室へ行け」

『はい、こうなったら試召戦争をかきみだしてやる。』

ビリビリ

俺は振り分け試験の結果を見ようと封筒を破った

《平野優樹 Fクラス

上記のものを観察処分とする》

『おいおい、Fクラスは想定内だからいいが観察処分者かよ、やっぱ教師を殴ったのがいけなかったのか？』

などと呟きながら校舎に向かうのであった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0506v/>

---

バカと超人と召喚獣

2011年10月9日11時30分発行